

黒木 亮

Kuroki Ryo

国家と ハイエナ

国家とハイエナ

黒木 亮

幻冬舎



9784344030176



1920093018005

ISBN978-4-344-03017-6

C0093 ¥1800E

定価(本体1800円+税)

ヘッジファンドは
ウミヘビだ! ハゲタカだ!
凶悪盗賊団だ! ドニ・サス=ンゲツ

(コンゴ共和国現大統領)

破たん国家の国債を二束三文で買い叩き、欧米で勝訴判決をとり、
タンカーや外貨準備や人工衛星を差し押さえて、
投資額の10倍、20倍のリターンをむしり取る「ハイエナ・ファンド」。
狙われた国家は、合法的手段で骨の髄までしゃぶられる――。

恐るべき現実を描く、本格派国際金融小説!

書き
下ろし



幻冬舎

定価(本体1800円+税)

法律書を抱えたハイエナ vs 腐敗国家 vs NGO

国家を喰い物にしているのは、ヘッジファンドか、それともその国の権力者か!?
彼らに対し、国際NGOが、強奪的金融手法と汚職を阻止しようと、
先進国政府や国際機関に働きかける。しかしNGOの中からも、
金に窮してヘッジファンドへ転職するメンバーが――。

正義と欲望のはざまで、激烈な三つ巴の金融バトルが始まる!

最後に笑うのは、果たして誰か!?

「日本ではほとんど報道されていないが、
ここに書いた話はすべて現実起きたことである」(著者)

目次

はじめに	7
プロローグ	8
第一章 ペルー対ハイエナ	24
第二章 ザンビアの英国人	55
第三章 運命の旋回	88
第四章 ブリュッセルの死闘	112
第五章 ネーム・アンド・シエイム	151

第六章 原油タンカー差し押さえ	191
第七章 英国王立裁判所	249
第八章 ゴールドフィンガー	282
第九章 ウェストミンスター宮殿の攻防	323
第十章 ギリシャの窮地	376
第十一章 アルゼンチンよ、泣かないで	392
エピローグ	486

都営新宿線の大島駅付近は、大型の団地が建ち並び、中の橋商店街という下町情緒あふれる通りがある。春には梅、桜、沈丁花、初夏にはツツジ、夏は百日紅や紫蘭、秋は金木犀、冬は椿が咲く町を沢木も夫も気に入り、昭和四十年代に越してきた。

カイロのアジア・アフリカ人民連帯機構事務局で一緒に働き、帰国後は共産圏貿易の専門商社に勤めて沢木の活動を支えた夫は、数年前に他界した。

部屋には、ナイル河畔で写した二人のセピア色の写真や、下町のバザールで買ったブリキ製のピラミッドの絵皿などが飾られていた。当時は、ナセル大統領の社会主義政策全盛時代で、農地改革を行ったり、パン、小麦、食用油、ガソリンなどに補助金を積極的に出したりしていた。沢木は夫とともに、市内のパンション（長期滞在者用ホテル）に住み、エジプト人と同じ物を食べて暮らした。缶入りの醤油だけは持っていたが、船便で送られてきたため、赤道を通過するときに味が著ていた。その変質した醤油を現地で売っているオクラにかけ、納豆のつもりで食べたりはソ連製のかちんかちんの代物で、湯に入れても溶けなかった。

その日、沢木容子は永田町の首相官邸を訪れ、午前十一時十五分から小渕恵三首相と面会した。

七月下旬に開催される九州・沖縄サミットの議長国を務める日本政府に、途上国の債務削減問題について申し入れをするためだった。

二年前の五月に英国バーミンガムで開かれたG8サミットで「ジュビリー2000」運動が、途上国債務問題解決を世界に向けて発信したのを受け、米国のクリントン大統領や英国のゴードン・ブラウン財務相が債務削減提案を行い（クリントンは先進国全体で七百億ドル、ブラウンは同五百

億ドル）、沢木らの運動は大きな推進力を得た。昨年六月にドイツのケルンで開かれたサミットでは、総額七百億ドルの債務削減が合意され、その中に、二国間債務の全面帳消しも含まれた。

こうした世界的債務削減運動にもっとも抵抗しているのが日本政府だった。欧米先進国が早い段階で政府開発援助（ODA）を無償援助（贈与）に切り替えたのに対し、いまだに円借款という有償援助（融資）が中心の日本は、HIPSに対して約一兆千七百億円の債権を保有している。そのうちODA債権は、フランスの二倍、ドイツの三倍、米国の四倍に相当する約一兆三百億円で、もし削減されるとダメージが大きい。また、戦後、自ら「借りた物は返す」という考えで歯を食いしばって借金を返し、そうした自助努力によってこそ経済発展を実現できるといふ国家的信念も債務削減の妨げになっていた。

「それでは、面会時間は十分間ということをお願いします」

沢木らが応接室に通されると、首相秘書官の男性がいった。

テレビのニュースで見るとおりそのままに、椅子がコの字形に配置され、小渕恵三首相が真ん中にすわった。小渕の右隣に沢木容子、その隣に、沢木とともに日本における「ジュビリー2000」運動の共同代表を務める白柳誠一枢機卿（カトリック東京大司教区）と連合の鷲尾悦也会長の代理の鈴木英幸副事務局長（政策担当）がすわった。それぞれローマ・カトリック教会と国際自由労連に尻を叩かれて運動に加わっていた。首相の左隣には、藤田幸久衆議院議員（民主党）、武山百合子衆議院議員（自由党）、緒方靖夫参議院議員（共産党）ら、超党派の議員六人がすわった。（まったく、こんなすわり方するなんて、話しづらいわねえ……）

沢木は心の中ではやいた。首相に物をいうためには、椅子に半ずわりになって、斜めの角度から

話さなくてはならない。中国共産党のトップと外国要人の会見のようだ。

「では、最初に記念撮影を」

藤田幸久議員と小渕首相が立ち上がり、申し入れ書を手渡すところを写真撮影した。

「最貧国の自立支援と債務帳消しを考える議員連盟」の羽田孜会長（元首相）からの申し入れ書で、九州・沖縄サミットに関する日本政府への要望が列記されていた。

〈1. 議長国としてのイニシャティブ

(1) サミット参加国は、ケルン・サミットで確認された重債務貧困国四十一ヶ国の二国間ODA債務の帳消しを二〇〇〇年中に実施すること（すでに英米両国はこの方針を表明している）。

(2) 多国間債務（IMF・世銀等国際機関からの債務）に関しては、構造調整プログラムを重債務貧困国の債務帳消し問題に組み入れないこと。これに関しては、IMFが保有する金の売却および参加国の拠出により二〇〇〇年中に債務帳消しを実施すること。また日本政府は議長国として各国の拠出金を明記すること。

2. 最大の債権国としてのイニシャティブ

(1) 日本政府は、ケルン・サミットで主張した四十年もかかる「債務救済無償援助スキーム」ではなく、特別立法を制定し、直接二〇〇〇年中に債務帳消しを実施すること。

(2) 以上の内容を沖縄サミット前に公表すること。〉

「小渕首相、サミットの議長として、ケルン・サミット前にドイツのシュレーダー首相がしたよう

なリーダーシップを発揮して頂きたく思います。それから、債務の帳消しを名目にIMFが構造調整プログラムを強制しないこと、日本に関しては、四十年という長い期間ではなく、一気に債務の帳消しをするようにお願いします」

元々難民救済などの市民活動家だった藤田議員がいった。間もなく五十歳になる穏やかな感じの男性である。

前年のケルン・サミット前に、ドイツのゲアハルト・シュレーダー首相は、二国間（ODA）債務の全面的帳消し、IMFが保有する金の売却、HIPS信託基金への拠出など、大胆な提案を発表した。

藤田に続いて他の五人の国会議員が一人ずつ発言をし、ここで半分の五分が経過した。

続いて、沢木、白柳、鈴木、鈴木の三人が要請書を首相に手渡すところを記念撮影。

要請書は、超党派議員連盟の申し入れ書とほぼ同じ趣旨で、先進各国の途上国債務問題に対する取り組みや日本が保有する債権の帳消しの方法について詳しく書いてあった。

「小渕総理、『ジュビリー2000』は今世紀最大の市民運動になっています」

白髪まじりのショートカットでグレーのスーツを着た沢木は、首相をまっすぐ見ていった。

日本では二年前（一九九八年）に、労組・NGO・キリスト教関連団体など約五十の団体と、六十人からなる超党派の国会議員団によって運動推進のための連合体が結成された。

「昨年のケルン・サミット以降、G8各国は次々と二国間債務の帳消しを発表し、残るは日本だけです。総理のご決断をお願いします」

「はい、はい」

おおよぼ口の首相は、人の好きそうな顔でうなづく。

「沖縄サミットの議題の中に途上国債務の問題が入っていないので、独立の最優先事項として入れて頂きたいと思います」

「ああ、そうでしたか。はい、はい」

「それから、ブセナの会場にNGOを入れるよう、アクセスの確保をお願いします」

サミットは、沖縄県名護市の高級リゾート・ホテル「ザ・ブセナテラス」で開かれる。

「ああ、はい」

小淵は愛想だけはよいが、どこか上の空。ひどく疲れているようで、顔色も悪い。

「総理、議題はシエルパ（サミットにおける各国首脳の補佐役）が取り扱っていますが、債務問題が総理にきちんと報告されていないのではないのでしょうか。シエルパによく伝えて下さい」

藤田議員が見かねたようにいった。

「え、えっ？ シェ、シエルパ？」

小淵はシエルパという言葉も知らない様子。

（これはひどいわ。……小沢一郎の連立離脱問題で、途上国債務問題どころじゃないのかしら？）

自民・公明両党と連立政権を組む自由党の小沢一郎党首が、小淵首相に対して、自民・自由両党の合流を提案していた。これに対し、自民党内の反小沢勢力が、小沢抜きでなら復党を認めると主張し、小沢が、ならば連立解消だと応酬し、揉めていた。

「えー、では、わたしのほうから一言……」

小淵が先ほどから握りしめていた一枚のペーパーを読み上げ始める。

隣にすわった沢木が覗き込むと、「我が国の債務救済無償援助スキームについて」というタイトルの付いている、外務官僚が作ったブリーフィング・ペーパーだった。

債務救済無償援助スキームは、借入れ国にまず債務を返済させ、返済が確認でき次第、それと同額の無償援助を供与し、その資金であらかじめ合意された品目リストの中から、物資等の購入をさせるものだ。借入れ国は、物資こそタダで貰えるが、返済のための資金は引き続き自力で、しかも外貨で用意しなくてはならない。また、債務完済までに最長で四十年という円借款の残存期間と同じ時間がかかる。

「えー……、1. 日本のODAは、途上国の自助努力を促すのを目的としており、そのためには無償の資金援助はしない。しかし、貧困国に対しては『債務救済無償援助スキーム』を実施している。2. 債務の帳消しは、日本のODA政策の根本的な方針転換を意味するので、長期にわたるODA政策の見直しが必要である。3. 日本は経済の不況下にあり、債務の帳消しには国民の支持が得られない……」

小淵は、ペーパーを棒読みする。

沢木が覗き込むと、ペーパーの余白に、小淵のものと思しい字で、〈江戸時代には徳政令（注・正しくは棄捐令）があったが、こんにちでは、借りたものを返すのは当たり前。チャラすると経済が成り立たない〉〈わたしは『平成の借金王』と呼ばれているが、これは個人の借金ではなく、国家の借金〉

（なに、これ？）

「平成の借金王」のくだりは、面会のテーマとはまったく関係がない。昨日、夕刊紙に赤字国債を

急激に増やしたことを批判され、大きな見出しにそう書かれたので、怒って何か一言いいたいというところのようだ。

「……えー、徳川時代には徳政令というものがありませんが、こんにちでは……」

「総理、借りたものを返すとか、返さないとかの次元の話ではありません！」

沢木の剣幕に、小淵は驚いて顔を上げる。

「重債務貧困国では、食べ物や医薬品に回すべき金を借金の返済に回し、毎日毎日本人が死んでいるんです。経済の問題ではなく、命の問題です。予防接種をしていれば救われる子どもたちの命と引き換えで債務を払っているのです」

「……」

「近代以前の社会では、借金が返せないと牢屋に入れられました。江戸時代には、借金を返すために娘を女郎屋に売ったりしました。しかし、現代の文明社会では、会社も個人も破産制度があり、刑事罰を受けることも、首を吊る必要ありません」

静まり返った室内に、沢木の怒りの声が響く。

「しかるに国家の借金には、自己破産という制度がありません。それで人がたくさん死んでいるんです。あなたがおっしゃる、借りたものは返すというのは、江戸時代以前の発想です！」

「あ、ああ……そうですか、はい」

小淵は、どこかうつろな視線でうなづく。

「えー、それであ……わたしは『平成の借金王』と呼ばれたりしているわけですが……」

小淵が話し終わると、ちょうど十分が経過した。

「以上で面会を終わります」

秘書官が宣言すると同時に、小淵はすつくと立ち上がり、そそくさと部屋から出て行った。

……

「は、千代田区の半蔵門駅に近いホテルのレストランで、同じ途上国支援のNGOのロンで働く英国人女性と昼食をとった。

帝国ホテル系の新しいビジネス・ホテルで、レストランは二階まで吹き抜けになっており、美術館を思わせる。全面ガラス張りの巨大な水槽のような窓の向こうには、明るい春の日差しに包まれた桜田壕と、ほぼ満開の皇居の桜が見える。

「……とにかく、昨日はがっかりだったわよね」

栗色の髪で体格のよい英国人中年女性がぼやいた。英国のノッチンガム大学を出たエネルギーシユな人柄で、昨日、沢木が小淵首相と面会したあと、参議院議員会館で国会議員らと一緒に開いた記者会見に出席した。

会見には国会詰めの記者たちが多数参加したが、一行の記事やニュースにもならず、日本のメディアの関心の低さを裏付けた。沢木らが小淵首相に面会したことすら、「首相の動静」に記述がなかった。

「わたしも日本人として情けなくなっただわ」

海藻入りサラダをフォークで口に運びながら、沢木がしかめ面になる。

「村山首相のときは、あんなにひどいことはなかったんだけど」